

平成 21 年 度 学 校 評 価 書

学校名	兵庫教育大学附属幼稚園
-----	-------------

1 学校教育目標

<p>心身ともにたくましい子どもの育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 健康な体の子ども ○ よく考えて最後までやりぬく子ども ○ やさしく豊かな心をもつ子ども
--

2 本年度の重点目標

(1) 園運営、地域への貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、地域の子育て支援プログラムの充実を図り、より効果的な子育て支援事業を推進する。
(2) 教育研究活動	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児一人一人の特性に応じた適切な指導ができるようにキンダーガーデンカウンセラーのアドバイスも参考に教員間で情報を共有し指導にあたる。 ・園内における「自然とともにある生活」を見直し、幼児の遊びや生活につながる保育の在り方を探る中で、研究テーマ「保育におけるつながりを考えるー自然とともにある生活を通してー」(1年次)に迫る。
(3) 他校種との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・大学との連携では、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。

3 自己評価結果(達成状況)【A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない】

分野・領域	評価項目(取組内容)	取組達成の状況	評価	改善の方策
園運営	○組織運営 ・教員一人一人の主体的な取り組みを促すよう、園長がリーダーシップを発揮し、大学と一体となった園運営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・園務がスムーズに遂行されているかを教員会議や日々の保育情報交換会の場において点検するとともに、附属学校運営委員会での審議をふまえながら、園長のリーダーシップのもと、大学と一体となった園運営を行った。 ・各教員が、自己目標を定め、常に意識して園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、定期的に管理職が個別の面談や指導助言を行った。 ・保護者による「幼稚園教育アンケート」からも、本園の教育や運営に対して、肯定的な評価が得られていた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も園長のリーダーシップのもと、教員会議や保育情報交換会、園内研修を通して、幼稚園全体としての保育の質の高まりや、共に学び高め合う教員集団をめざし取り組んでいきたい。
	○学年、学級経営 ・目指す各学年や学級の姿に向け、ねらいを明確にし、計画的な環境構成を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初に各学年毎のねらい、指導計画、指導の重点、家庭との連携、協力指導体制などについて定め、計画的な指導を行うとともに、学期毎に振り返りを行い、各学年・学級の課題を明確にして保育を進めた。 ・園行事においても、学年・学級でのねらいや目指す姿を明確にし、計画的に取り組んだ。 ・学期に2回程度、教員相互に保育を見合う会を実施し、大学幼年教育コース教員にも参加を求め、保育の向上に努めた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・目指す学年や学級の姿に向け、保育のねらいを明確にして計画的に取り組んでいるが、反省・評価をより活かし、園内研修などの機会を活用して、保育の質の向上に努めたい。
	○説明責任 ・日々の保育については降園時の説明及び「学級、学年通信」等で報告し理解を求め。各行事については、取り組みのねらいを明確に知らせ、併せて事後のアンケートの結果を参考にその成果及び課題を「ふよっこだより」等で公表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の降園時には、各担任からクラスの保護者に対して、その日の保育のねらいやそれに基づいた保育の様子を幼児の姿を交えて伝える時間を設け、保護者に幼児を引き渡す際にも、個別にその日の様子を手短かに伝えてきた。 ・学級、学年通信を月1回程度発行し、幼児の実態や担任の保育に対する思い等を、写真を掲載するなどして、わかりやすく伝えてきた。 ・各行事ごとに、活動のねらいや趣旨、実施計画を「ふよっこだより」(年18回発行)として配付し、行事終了後は保護者にアンケートを行い、活動の成果や改善点等を再度「ふよっこだより」で知らせてきた。 ・保護者による「幼稚園教育アンケート」の結果でも、教育方針をわかりやすく伝え、保護者の願いに応えようとしていると評価されていた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・月1回程度であった今年度の学級、学年通信の発行回数を増やすなどして、さらに十分な説明をしていきたい。また、幼稚園のHPにも掲載するなど、幼稚園の教育についての説明責任を果たすとともに、地域の方々にも公開していきたい。

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

<p>学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園運営についての自己評価結果は妥当であり、改善の方策についても適切である。 ・組織運営については、園長を中心に教員一人一人が明確な目的をもって学級活動を基盤に園全体の運営に主体的にかかわっている様子が伝わってくる。 ・教師間の共通理解に基づく協力体制が確立され、家庭と連携する姿勢を持って学年・学級運営が行われていることは、保護者の安心感、信頼感につながっていると感じる。教員の資質を高めようとする姿勢も評価できるので、どのように自己の保育の改善につなげていくかをさらに追求してほしい。また、教員が近隣の幼稚園の研究会に参加する機会もできるだけ持てるようにしてほしい。 ・説明責任は、適切に果たされている。特に、学年通信を全学年に配付するという試みは、他学年の活動や園全体の遊びの流れを知ったり、下の学年の保護者が、今後どのような経験をしていくのかを知る上でよい手立てになっている。学級・学年通信を読みやすくする工夫を、さらに重ねてほしい。また、研究についても「ふよっこだより」等で協力依頼をしているが、取り組んでいる内容や結果を保護者に提供し理解と協力を得ることにより、さらにテーマに迫れるものと考えている。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
	<p>○子育て支援事業の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「親育てプログラム」として、「子育てひろば」へのスタッフとしての参加、「誕生会」「親子活動」「弁当参加」「にっこ子育て講座」とそれらの活動を通じた保育参加・保育参観を実施した。 スタッフとして参加する保護者には、事前の打ち合わせや事後の反省会を設け、子ども達へのかかわりを確認し合ったり、保護者同士のつながりがもてる場となるようにするとともに、参加していない保護者にも活動の様子がわかるように「だあいすき」を発行し、情報提供した。各クラス単位でスタッフとなる活動の場合は、どのクラスでもほぼ全員の参加が得られた。また、「誕生会」や「弁当参加」では、園長・副園長を交えた懇談会や担任と話す機会を設け、保護者の気づきを促し、子育てを振り返る機会となるようにした。 「親育てプログラム」の実施による保護者の保育力の変化を探るために、各担任がチェックシートで点検した（現在分析中）。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 「子育てひろば」へのスタッフとしての参加は、クラス単位での活動でない場合には、参加者が少なく固定化する傾向にあるので、保護者にとって負担のない形で参加しやすくするための方策を練っていききたい。 チェックシートの分析結果を受け、無理なく効果的な「親育てプログラム」を継続する判断材料としたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 子育て支援については、計画的に実施され、親が子育てを学ぶ機会を提供している。また、担任以外にも、園長や副園長と話す機会のあることが、より身近になれるきっかけとなっている。「子育てひろば」へのスタッフとしての参加は、保護者が自己発揮し、保護者同士がつながれる場であるので、企画を教師がするなどの工夫をして、継続してほしい。
	<p>○危機管理体制の整備及び施設の拡充</p> <ul style="list-style-type: none"> 「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき年4～5回の避難訓練を実施するとともに、毎月の施設設備の定期点検とその改善・拡充に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 避難訓練は、不審者対応、火災、地震を想定し、年5回実施した。加えて、被災時における引き渡し訓練も実施した（年1回）。 不審者侵入時の対応について、県警より講師を招聘し、全教員で訓練をするるとともに、その訓練を活かし危険等発生時対処要領を改善した。 業者による大型遊具の点検を行い、さらに、毎月の安全点検を点検項目にそって実施し、その結果に基づく施設整備の改善を速やかに行うことができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 幼小合同の不審者侵入時対応訓練を、年度計画作成の段階から組み込んでいききたい（現在、附属小学校と調整中）。 毎月の安全点検の項目に移動遊具等も盛り込み、安全管理をより徹底していききたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 危機管理体制については、危機意識をもって適切に取り組んでいる。時間が許すのであれば、不審者対応、火災の避難訓練は毎月でも行うようにするとより身につくと思われる。
教育研究活動	<p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 幼児一人一人の特性に応じた指導ができるよう教員同士及びカウンセラーによるアドバイス等を日々の保育情報交換会や教員会議等で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学級の週の指導計画等を全教員に配付し、全学年全学級の保育の経過や各担任の保育の意図を共有するとともに、学年・学級の枠を越えて教員間で連携し、幼児支援や指導を行えるよう協力体制をとった。 毎日の保育終了後に保育情報交換会を行い、一日の保育や幼児の様子、育ち、課題等を話し合った。 キンダーガーデンカウンセラーには、週1回定期的に来園してもらい、個別配慮の必要な幼児の指導方法のアドバイスを受けてたり、保護者の相談へとつないだりすることにより、より適切な指導を行うことができた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 配慮を要する幼児のことや指導上困難なことなど多面的に話題を提供し、自由に意見を出し合っているような雰囲気作りをし、教員間の意思の疎通や共通理解をさらに図っていききたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育研究活動についての自己評価結果は妥当であり、改善の方策についても適切である。 個別の幼児への支援については、専門的な立場からの協力体制が確立され、具体的な支援の情報交換と共通理解がなされており、高く評価できる。副担任制の活用や就学前の小学校との引き継ぎのあり方を検討することで、さらに充実を図ってほしい。
地域への貢献	<p>○開かれた幼稚園づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年12回実施し、地域、幼稚園、家庭がともに育つ活動を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 未就園児親子参加の「子育てひろば」を、年12回実施した。年間の参加登録者数は123組であった。一日の前半は、「うれしのタイム」（在園児や「きっすくらぶ」の保護者が遊んでいる場）に参加、後半は園長の「子育てワンポイント講座」と副園長による「ふれ合い遊び」の日と、各クラス単位で在園児や保護者と共に活動をする日とを設けたが、参加者へのアンケート結果からも、活動内容等に賛同している意見が多くみられた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 「子育てひろば」については、活動内容の紹介や参加の呼びかけを、地域の広報誌や幼稚園のHP等に掲載し、より積極的に啓発していききたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域への貢献についての自己評価結果は妥当であり、改善の方策についても適切である。 未就園児親子が参加する「子育てひろば」は、綿密に計画を立て実施されていることで成果を上げている。今後も継続していくことが望まれる。可能であれば、「にっこ子育て講座」への参加も呼び掛け、子育てについて学ぶ機会を提供していくことも検討してはどうかと考える。また、年度末のアンケート等を利用し、参加している地域の子育て支援活動の実態を知ること、あり方を検討していく参考になると考える。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
	<p>○研究発表や公開保育</p> <ul style="list-style-type: none"> 年3回の幼年教育研究会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> 第1回幼年教育研究会(5/27)は、新型インフルエンザ対応のため中止した。第2回幼年教育研究会(10/31)を公開の研究発表会と兼ねて実施し、県内外の公私立幼稚園、保育所、大学教員、大学院生等、約200名を参加者として迎え、公開保育、研究発表、講師による講演を行った。第3回幼年教育研究会(1/27)は、約80名を参加者として迎え、公開保育、研究発表、分科会、講師による助言を受け、本年度のまとめとした。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 今年度は、第2回幼年教育研究会(研究発表会)を土曜日に実施し、県内外からの多数の参加者があった。次年度以降も、年3回の幼年教育研究会のうち、1回を土曜または休日の開催とし、広く地域の幼児教育関係者と共に、より研修を深められるようにしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 公開保育は、広く公開するという点からも、参加しやすい土曜または休日開催していくことはよいであろう。年3回の幼年研究会の開催は大変な作業が必要となるので、1回を研究発表会形式にして、あとの2回は保育を公開した上で参観者と話し合うような形にしてはどうかとも考える。
	<p>○校種間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 近隣の高校も含めた他校種との交流は、ねらいを再認識し、活動を見直す中で互恵性のある連携活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 附属中学校とは、「保育」の授業の一環で、3年生と4、5歳児がペアを組み、交流活動を年2回実施した。事前の打ち合わせをもとに互いのねらいを明確にして活動することで、互恵性のある連携活動とすることができた。 附属小学校とは、給食交流を5年生、2年生と5歳児の間で各1回ずつ実施した。2年生との交流は3学期に行い、「生活科」の中に位置づけられた活動であったことにより、児童も意識して幼児を迎え、幼児も就学に向けて期待のもてる活動となった。互恵性のある活動とするための事前事後の話し合いが十分でなかったことが課題であった。 三附属連携推進委員会の「幼児、児童、生徒部会」のもと、幼小中で連携した交流活動を年2回実施した。 今年度は、インフルエンザ対策により、社高校との弁当交流が見送られたが、体育科による「行進」を全園児で見る機会を設け、その後一緒に遊ぶことで交流を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 附属小学校との交流については、教員間の連携が十分に図られていなかったことが課題であるため、幼稚園から日常的にかつ積極的に働きかけて連携を図っていききたい。 三附属連携推進委員会の「幼児、児童、生徒部会」での交流は、形式的交流となっているため、在り方を再検討していききたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 他校種との連携についての自己評価結果は妥当であり、改善の方策についても適切である。 小学校、中学校、高校、大学それぞれとの交流・連携を実施できるのが附属の最大の魅力であり、子ども達にとっても、多くの人間関係を築くことは意義のあることなので、今後も恵まれた環境を最大限に活かしてほしい。互恵性のある交流のためには、ねらいを明確に設定し、十分な話し合いを行うことが必要である。特に、幼小連携は重要であるので、出向いて行ったり、場を提供したりして、幼稚園側から積極的に働きかける姿勢を大切に組み込んでほしい。
他校種(小、中、高校、大学)との連携	<p>○実地教育(教育実習)</p> <ul style="list-style-type: none"> 実地教育Ⅲでは、指導講話の内容を精選し、効果的な実習につながるよう努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 実地教育Ⅲでは、効果的な実習となるよう実習にあたっての指導講話の内容を精選し、新たに「シミュレーション」を加えて実施した。 授業の空き時間を利用して参加する実地教育Ⅴでは、実習生のもつ課題を担当教諭と共有する時間がもちにくいため、各自の課題についての記録の提出を求め、後日担当教諭と話し合いの機会をもちたり、コメントを書いて学生に手渡すことで、効果的な実習ができるようにした。 新カリキュラムとして今年度より実施の「学校サポート体験学習」では、行事に向けての継続的な実習を各自が計画し取り組むようサポートすることができた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 実地教育Ⅲについては、指導講話の中で共通して理解させたいこと、また、事前に大学の講義で学んでおくべき内容を大学教員と吟味し、より効果的な実習ができるようにしたい。 カリキュラムの変更に伴い、来年度より、実地教育Ⅴが廃止され、「学校サポート体験学習」ⅠとⅡの学生が混在し、実習することになる。この実習も授業の空き時間を利用しての参加となるため、各自の課題にそった記録を提出させるなど、より効果的な指導ができるようにしていききたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 実地教育Ⅲにおける指導講話は、園と大学幼年教育コースとの十分な連携がなされているため、事前に大学に出向いたり、あるいは、学生に来てもらうことで、各講話のテーマについて、もう少し時間をかけて丁寧に説明することが可能かもしれない。
	<p>○大学との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 3、4歳児の親子活動(各年1回)を、大学教員の指導のもと実施した。 4、5歳児の陶芸活動(各年2回)、5歳児の運動遊び(年1回)、5歳児の異文化交流(年2回)について、専門の大学教員から指導を受けた。今年度の陶芸活動は、活動場所を大学キャンパスに移すことで、陶芸活動だけでなく、彫塑や絵画などの本物に触れる機会を得たり、自然豊かなキャンパス内を散策し、のびのびと遊ぶことができ、大学附属であればこそ体験できる保育を展開することができた。また、異文化交流では、大学教員のコーディネートののもと、韓国や中国の留学生のネイティブの言葉や発音を直接耳にする機会をもち、異文化に触れることができた。 PTAとの共催で年5回実施した「にこにこ子育て講座」で、大学教員による生演奏を聴く機会を得たり、講義を聴くことができたりした(年2回)。 大学幼年教育コースの教員には、幼年教育研究会の講師やコーディネーターとして参加の他、園内研修会にも参加を依頼し、指導助言を受けることができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 協力教員との連絡が取りにくいことがあったので、メール等を活用し、事前の打ち合わせを十分に行って成果をあげていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学施設の活用や大学教員による指導は、他園では実現できないことであるので、今後とも継続してほしい。